

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2259 号

Safety and usefulness in elderly patients 80 years or older of endoscopic submucosal dissection for early esophageal cancers

80 歳以上の高齢者における早期食道癌に対する ESD の安全性と有効性

宮本 康雄 (みやもと やすお)

博士 (医学)

論文内容の要旨

早期消化管癌に対する粘膜下層剥離術 (ESD) は標準治療として広く行われているが、技術的難易度が高く、長時間の手技となることも少なくない。この研究の目的は高齢者における早期食道癌に対する ESD の安全性と有効性を評価することである。2011 年 1 月から 2016 年 8 月に国立がん研究センター中央病院で早期食道癌に対して ESD が施行された 393 患者を後ろ向きに調査した。患者背景、内視鏡所見、使用薬剤と使用量、ESD 結果、長期成績について 80 歳以上 (A 群、n = 42) および 80 歳未満 (B 群、n = 351) の 2 群に分け比較検討した。A / B 群の平均年齢は 82.3 / 67.1 歳であった。早期食道癌の腫瘍径の中央値は、それぞれ 26mm (範囲、7-61mm) / 22mm (1-85mm) であった (P = 0.007)。処置時間は 110 分 (範囲、29-260 分) / 85 分 (24-504 分) (p = 0.006) であった。一括切除率は 100% (47 人) / 99.7% (396 人) (p = 0.62) であった。術中穿孔率は、0% (0 人) / 1% (5 人) (p = 0.25) で、遅発性穿孔は両群でみられなかった。後出血は 1 人 (2%) / 1 人 (0.3%) (p = 0.20) でみられた。80 歳未満の群で肺炎が 1 例 (0.3%) みられた。入院期間の平均は 7.4 日 ± 0.6 日 / 7.7 日 ± 1.2 日 (p = 0.32) であった。粘膜下層浸潤もしくは脈管侵襲陽性もしくは垂直断端陽性であった症例は 3 例 (6%) / 55 例 (14%) であった。ESD 後の追加治療はそれぞれ 0 例 (0%) / 51 例 (13%) であった。80 歳未満の群で追加治療の内訳は放射線療法が 1 例 (0.3%)、化学放射線療法が 48 例 (12%)、外科切除が 2 例 (0.5%) であった。ESD 後の観察期間はそれぞれ 35.4 か月 ± 14.6 か月 / 41.5 か月 ± 17.8 か月であった。局所再発を認めた症例は 0 例 (0%) / 0 例 (0%) (p = 0.58) であった。リンパ節転移再発は 0 例 (0%) / 5 例 (1%) (p = 0.23) みられ、そのうち遠隔転移が 80 歳未満の群で 1 例 (0.3%) みられた。観察期間中の異時性多発食道癌は 3 例 (6%) / 54 例 (15%) で死亡した症例はみられなかった。経過観察中の異時性頭頸部癌は 3 例 (6%) / 28 例 (7%) であった。食道癌による原病死した割合は 0 例 (0%) / 2 例 (0.6%) (p = 0.44)、その他の癌による死は 0 例 (0%) / 5 例 (1%) (p = 0.23) であった。他因死した割合は 1 例 (2%) / 8 例 (2%) (p = 0.95) であった。全生存率では 2 群間で有意差を認めなかった。本検討で、80 歳以上の高齢者に対する食道 ESD は、非高齢者と同様に安全に施行可能であった。少数の原病死を認めるものの、中期成績はおおむね良好であり、食道表在癌に対する有効な治療法であることが示唆された。

授与機関名 順天堂大学